

江戸時代の書は、大別すると、唐様の書と和様の書とに分けることができる。また書家の書、僧の書、学者の書、画家の書、政治家の書などに分けたりもする。

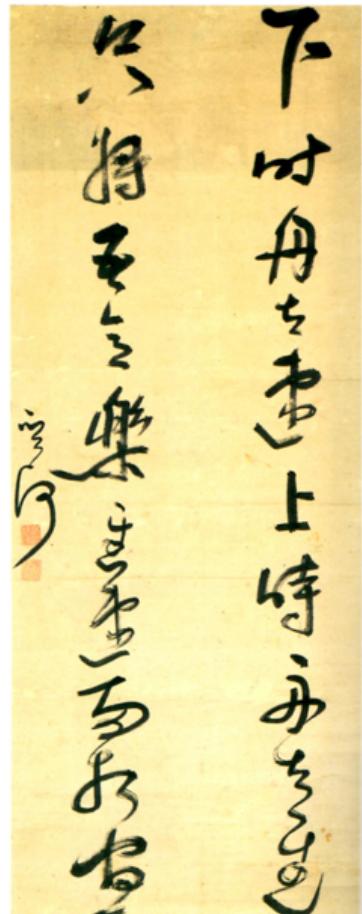
唐様の書は、墨蹟の書法を受け継いだ北島雪山が創始者とされている。墨蹟とは、大徳寺・妙心寺の禅僧と黄檗派の禅僧の書のことである。墨蹟は、北宋の米芾、元の趙孟頫、明の文徵明・祝允明・董其昌などの書風を基にしている。それを受け継いだ北島雪山の書は、細井広沢、寂巖、池大雅らへ伝えられ、そして幕末の三筆へと継承されていったが、江戸時代の中頃から、晋唐の書風を提唱する者があらわれ、その後、唐様は、明清派と晋唐派の2派に分かれて継承されてゆく。幕末の三筆の市河米庵は明清派、巻菱湖・貫名菘翁は晋唐派である。この2派の流れは、明治時代になつても続いてゆく。

和様の書の代表は、江戸時代初期は御家流を継承した「寛永の三筆」（松花堂昭乗、本阿弥光悦、近衛信伊）、中期は、幕府右筆の森尹祥・近衛家熙・加藤千蔭・池大雅らである。池大雅は唐様・和様と広く学んでいる。

学者の書

菅茶山（1748～1827）儒学者、化政期の代表的漢詩人。姓は菅波、名は晋師、号は茶山。唐様。

広島県福山市出身。門人に頼山陽らがいる。明末書の影響を受け、草書を得意とした。



菅茶山筆「五言絶句」紙本墨書
121.4×48.2 cm 東京国立博物館蔵
茶山書風の完成した時期の作品。

（自詠の絶句）

下時舟太速

上時舟太遲

只将吾有樂

遲速兩相宜

晋師

本居宣長（1730～1801）国学者、医師 三重県松阪市の出身 号は芝蘭、春庵など 和様の書

木綿商小津定利の長男。鈴と山桜をこよなく愛した 書斎の名も「鈴屋」という。『源氏物語』を好んだ。数十

年かけ『古事記』を研究し『古事記伝』全44巻を執筆した。

年の始によめる

初春や かしらの雪も

きえぬべし あさひにむ

かふ今朝のこゝろは

宣長

年ね始ふしも
袖もやかづめも
まもねてうめふし
うふと物のうめふし

宣長



「本居宣長六十一歳自画自賛像」

篠崎小竹

$$\begin{pmatrix} 1 & 7 & 8 & 1 \\ 7 & 8 & 1 & \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 8 & 5 \\ 1 & \end{pmatrix}$$

儒学者・書家 大阪出身

本姓は加藤

名は
彌^{たすく}

号は小竹 唐様

医師加藤周貞の次男。
13歳ころ篠崎三島の養子となつた。詩・書・篆刻に

卷之三

卷之三

自然

夢斷三更懶揭
篷江煙花不寐
西东猶猶聲
絕舟人靜夜是
夢帆游月中
漢河心

篠崎小竹「夢断」絹本 25×37 cm 七絶

漢河舟中作
小竹散人

西東山房詩

卷之三

卷之三

朝極雨水多薰蒸莫與涉江總
我一家但使此心安二龍原何妨一上
大夫車
宿靜
荅陽萬廣建

朝遊雲水暮蒹葭 島嶼洲汀總我家
但使此心無寵辱 何妨一上大夫車
詠鶴 荀陽廣瀨建

廣瀬淡窓（1782～1856）儒学者・漢詩人・教育者 大分県日田市出身
門人に高野長英・大村益次郎・長三州らがいる。「敬天思想」を説いた。

名は建
号は淡窓
唐様

朝極而水盡葉落無與汝以總
我家但使此心安二龍原何妨一上
大夫車 祐靜 荊陽葉衡建

広瀬淡窓「鶴を詠す」
紙本 44.7×127.2 cm

大夫車　詠鶴　蒼陽廣瀨建
朝には雲間や水辺を飛び回り、暮には
おぎやあしの茂みに憩う。
小さな島々や中洲は、すべて私の家で
ある。私はただ、自分の心が名誉や屈
辱に左右されたくないのだ。どうして
嫌おうか。仕官して立派な職責につく
ことを。
鶴を詠ず。蒼陽廣瀨建

佐久間象山（さくましまさとん、1811～1864）洋風兵学者・思想家・朱子学者。長野市松代出身。門弟に吉田松陰がいる。妻の勝順子は勝海舟の妹。勝海舟や坂本龍馬らに影響を与えた。唐様。三条木屋町で暗殺された（53歳）。

東洋道德西洋藝廊
相依完園模大地周圍一萬
里還湏缺得半陽無

手」七絶 136.8×60.3 cm 早稲田大学図書館

東洋の道徳、西洋の芸。大地周囲一帯
里 還須欠得半隅無」
里 完うす。大地は周囲一帯
里。また、須らく半隅を乍
くを得る無かれ。

印 款

吉田松陰（1830～1859）

兵学者・思想家・教育者

明治維新の指導者

松陰は号

通称は寅次郎

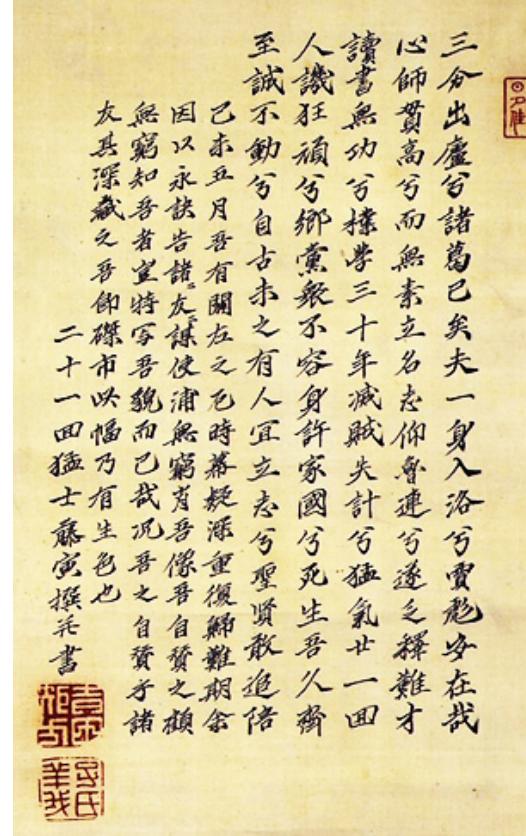
山口県萩市出身

門人に久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文らがいる。

安政の大獄で斬首刑に処された（29歳）。



松浦松洞画「吉田松陰像」
1959年（安政6）5月制作
贊は松陰 絹本着色
99.1×35.8 cm（吉田家本）
山口県文書館蔵



松陰の自贊部分 松陰は、この年の10月に処刑された。

（跋文大意）安政6年5月、私は江戸に送られるが、二度と帰つて来られないと思い、周りの人々に最期の別れを告げた。人々は、松浦松洞に私の絵を描かせ、私は言葉を添えることを求めた。私をよく知る松洞は、この絵に外見だけを写そうとしたのではない。ましてや私が言葉を添えるのだから。人々よ、この絵を末永く保管して欲しい。もし私が処刑されても、この絵の中に私は生きているのだ。

書家の書（前回載せなかつた書家）

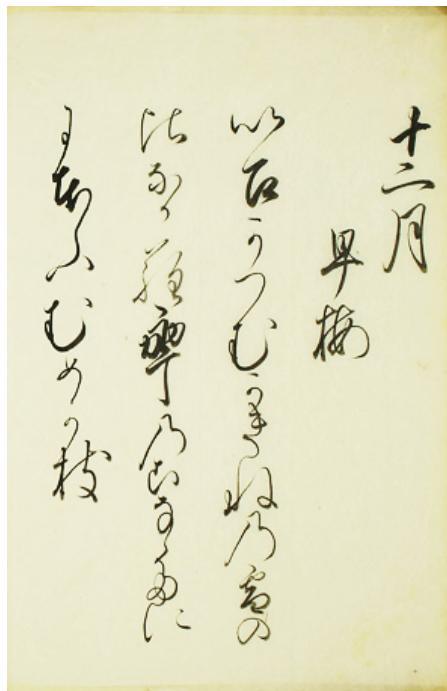


近衛家熙「書状」部分

「先刻より六條へ參候 はや散々沈
醉仕候 夜前ハ必可被成之旨・・・」

このいえひろ
近衛家熙（1667～1736）

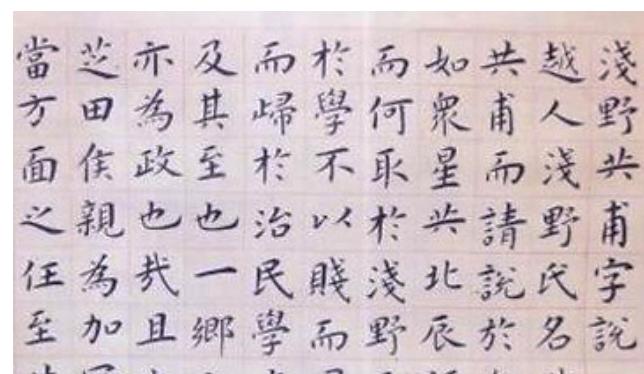
和様の書家 公家 号は予樂院
上代様の書風の再興に努力した。



森伊祥「12月花鳥和歌」部分 1786年
早稲田大学図書館蔵

もりまさよし
森伊祥（1740～1798）和様の書家
じみょういんりょう

持明院流の名人 幕府右筆



小島成斎「浅野共甫字説」部分 嘉永元年（1848）虞世南風楷書

こじませいさい
小島成斎（1796～1862）

唐様の書家。福山藩右筆。

幼少時、市河寛斎・米庵に師事。
後、狩谷楳斎に師事し、楳斎から中
国古書道の真髓を学んだ。

武士の書

山岡 鉄舟 (天保7年・1836～明治21年・1888) 政治家・思想家、唐様の書と剣と禪の達人

江戸生まれの飛騨高山育ち。号は鉄舟・一樂斎 通称は鉄太郎 15歳で、弘法大師流入木道51世の岩佐一亭から52世を授けられた。一刀正伝無刀流の開祖。鉄舟は、15歳から20年間、王羲之の十七帖を学んだという。慈雲尊者を日本的小糸迦とも言つた。「幕末の三舟」のひとり。西郷隆盛との会見で知られる侍。

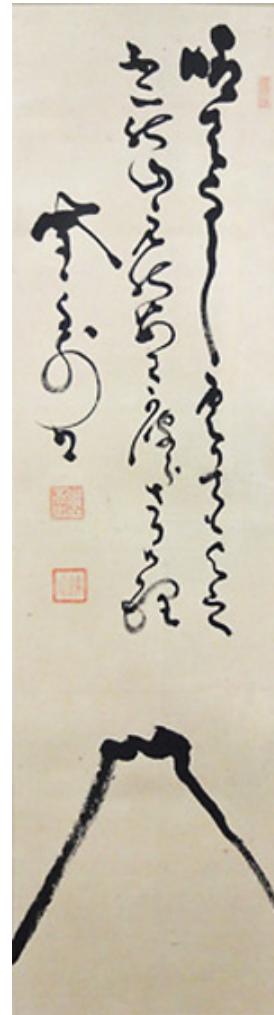
「謙遜・静穏には、天は応を表し、応するに福をもつてす。



鉄舟書「『漢書』東方朔伝のことば」
紙本 59.7×134.5 cm 個人蔵

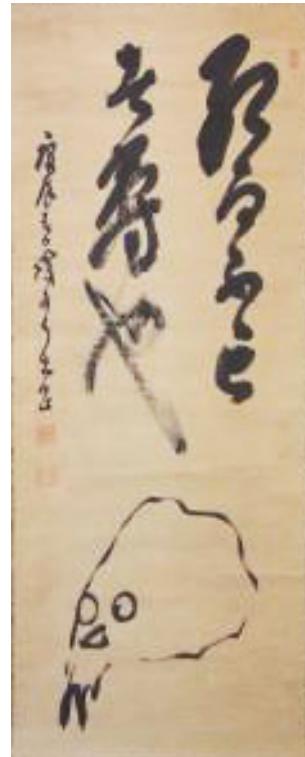
以福

謙遜・静穏には、天は応を表し、応するに福をもつてす。



鉄舟書「富士画贊」個人蔵
紙本 28.7×107.3 cm

晴れてよし
曇りてもよし
富士の山
もとの姿は
かわらざりけり



鉄舟「頭蓋骨画贊」紙本
133×51.5 cm

「死して而も亡びざる者は寿し。」

他にも髑髏の絵の贊に
「死にきつてみれば誠に樂がある死なぬ人には眞似もなるまい」などがある。

鉄舟の人生の究極目的は、天地同根・万物一体の理を体験し、それを広めることであつたらし
い。



泥舟「詩書」50歳頃の作品
紙本 46.1×133.1 cm 個人蔵

南の土手の方では雲一つない空に月が出て、草は一層緑を鮮やかに見せる。
西の方の林では早くも春らしく花がちらほらと咲き始めている。

僧の書

「禅林墨蹟」

禅林墨蹟とは禅僧の墨蹟のこと。墨蹟の本来の意味は、書の真蹟という意味だが、日本では一般に墨蹟といえ
ば禅林墨蹟のこととさす。墨蹟には、中国の宋・元代の禅僧のもの、日本の鎌倉から室町時代の禅僧のもの、江
戸時代の大徳寺や妙心寺の禅僧のもの、黄檗宗のものなどがあるが、ここでは江戸時代の代表的な墨蹟だけを記
す。

「黄檗の三筆」 隠元・木庵・即非の三人。彼らの墨跡が唐様ブームの発端となつた。

隠元 隆琦 (1592~1673) 明末清初の禅僧

1654年長崎に来航し、1660年黄檗山萬福寺を開創。



隠元書「額字原書」

萬山萬木萬元萬山



木庵書「真機没覆藏」 51×31.6 cm

木庵 性瑫 (1611~1684)

1655年来日 黄檗山萬福寺第2世。



即非書「竹林」 33.8×87.8 cm 黄檗山萬福寺蔵

即非如一 (1616~1671)

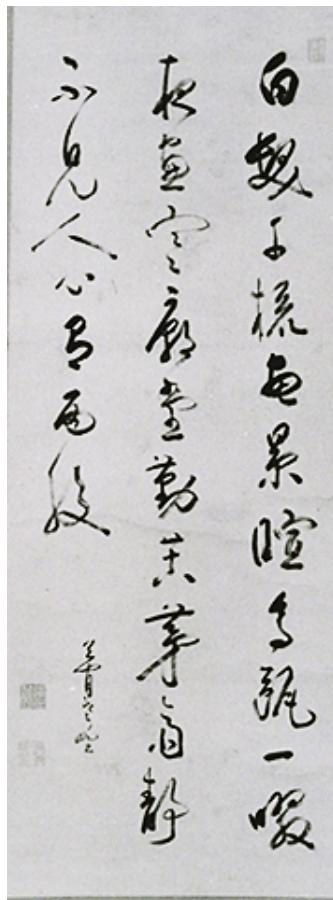
1657年来日、長崎崇福寺の中興開山。

1663年黄檗山萬福寺に移った。

北九州市の福聚寺の開山

臨済宗黄檗派（黄檗宗）の僧。

日本の文人画のさきがけと言われる絵を描いた。



独立書「七言絶句」 129.3×48.37 cm 京博蔵

独立性易 (1596~1672)

臨済宗黄檗派の禅僧

1653年（57歳）長崎に渡来し、亡命した。

1654年、隠元によって得度し仏門に帰依。

日本に書法、水墨画、篆刻を伝えた。

日本篆刻の祖（初めて石印材に刻する印法を伝えた。）『書論』の著書がある。

本格的な書。唐様の先駆者。



江月書「雨中看杲日」

江月宗玩（1574～1643）臨済宗の僧。大徳寺第156世。堺の生まれ。



清巖書「雲吐峯」103.8×29.8 cm 流行した大徳寺もの。石川県立美術館蔵



沢庵書「雲收山青」28.2×91.5 cm ミホミュージアム蔵

沢庵宗彭（1573～1646）臨済宗の僧 大徳寺153世。兵庫県出石の生まれ。宮本武蔵とは接触はなかったという（小説上のフィクション）。



白隱「暫時不在如同死人」永青文庫蔵
130×55 cm

「暫時も在らざれば、死人に如同す」
一瞬たりとも、わが主人公たる仏心
がお留守になるなら、死人も同じことだ。

「感動をやめた人は生きていないの
と同じことである。」（AIN SHUTAIN）

白隱慧鶴（1686～1769）

臨済宗中興の祖と称えられる。1717年、妙心寺第一座となる。

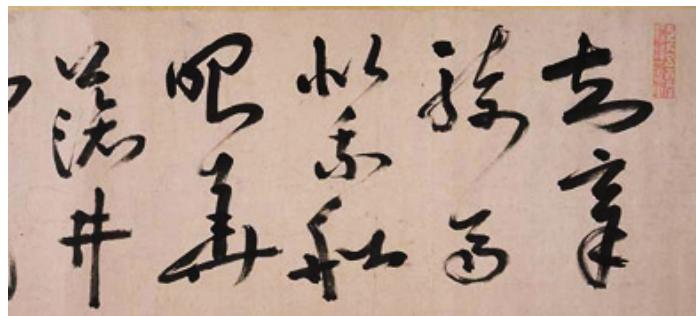
清巖宗渭（1588～1661）臨済宗の僧。大徳寺第170世。

滋賀県の生まれ。書は張即之の影響を強く受けている。

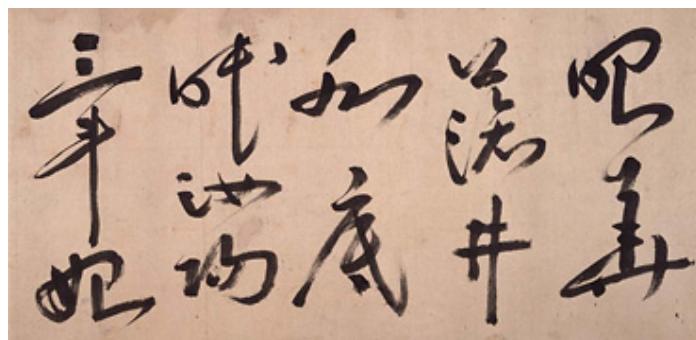


白隱「死字」紙本 37.5×55 cm 串本応挙芦雪館蔵

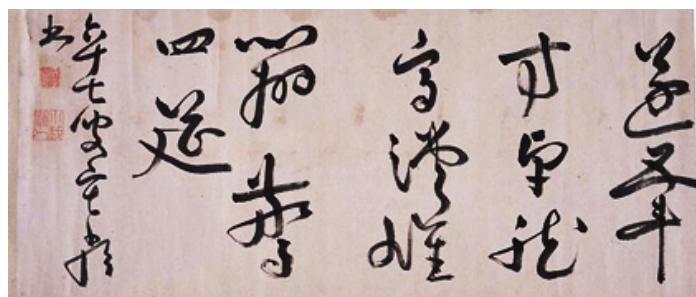
「真正參玄衲子 先須大死一番」と書かれている。「大死一番」とは、死ぬ覚悟で何かをしてみること。



寂巖「飲中八仙歌」部分 1765年 28.5×675.3 cm 東京国立博物館蔵
「知章騎馬似乘船 眼華落井・・・」



寂巖「飲中八仙歌」部分
「眼華落井水底眠 汝陽三斗始・・・」



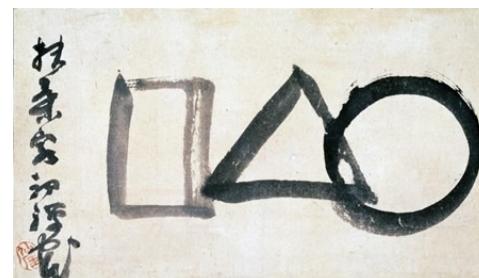
寂巖「飲中八仙歌」部分
「・遂五斗方卓然 高談雄辨驚四筵 六十七叟寂巖書」

禅宗でない僧たちの書

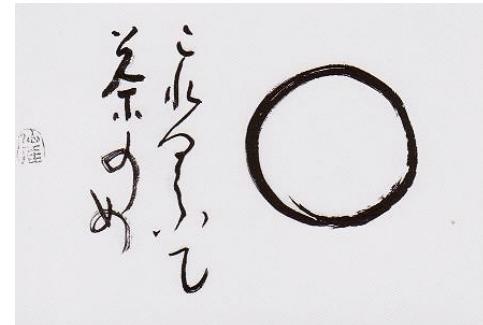
寂巖 (じやくいん) (1702~1771) 真言宗の僧。悉曇学の学者。悉曇とは梵語のこと。百種におよぶ梵語についての著作がある。書の名手。良寛・明月・慈雲とともに近世の「四大書僧」と呼ばれる。岡山県の生まれ。



仙厓「百寿老画と贊」 出光美術館蔵
贊: 百寿百人 都一萬年 猶是有限 故迎南
星於天



仙厓「○△○」扶桑最初禪窟 紙本墨画
28.4×48.1 cm 出光美術館蔵



仙厓「圓相」紙本墨画 26×42 cm 出光美術館蔵
贊: これくふて 茶のめ



仙厓「笑鬼画と贊」 出光美術館蔵
贊: 来年の事云た こたへむ こたへむ
おや方 何に笑ふかい

仙厓義梵 (せんがいぎほん) (1750年・寛延3~1837年・天保8) 臨済宗の禪僧、画家 岐阜県南部 (美濃国) の生まれ。日本最古の禅寺、博多の聖福寺の住持を20年間務めた。多くの禅画を残した。狂歌も有名。



明月「仏法大海信爲能入」
仏法の大海は信を能入と爲す

堺の南山人（宣周）に習つた。晋唐の書に通じ、蘇軾や懷素の書を研究し、草書を得意としたらしい。

明月雲寧（享保12年・1727～寛政9年・1797）真宗大谷派（浄土真宗）の僧。山口県生まれ。15歳で松

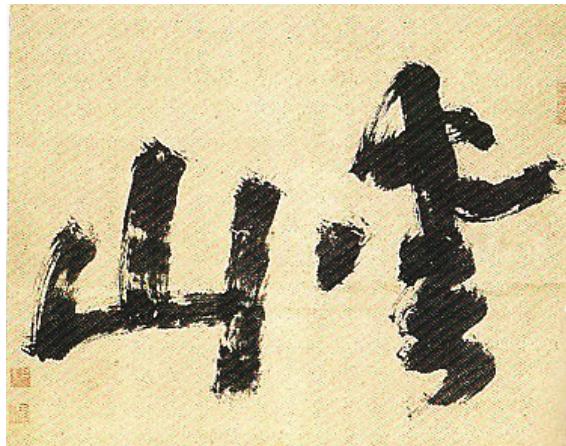
山の円光寺義空に師事。後、円光寺第8世住職。近世の「四大書僧」のひとり。字は曇寧、法名は明逸、号は明月・化物園など。酒を愛し、奇行が多かつたという。詩文・書を能くした。徂徠学（古文辞学）を学んだ。書は



「雙龍庵巖上坐禪像」49×120 cm
龍王寺藏

慈雲尊者 80歳代の肖像と思われる。

「山住は
げにはる秋のながめ
かぎりをわかぬ
葛城の雲
慈雲叟」



慈雲「愛山」（山を愛す）紙本 49.1×62.0 cm
愛と山が傾いて支え合い安定感を出している。
深々とした余白である。



慈雲書「阿字（梵字）」絹本 32.8×20.3 cm
金剛寺藏



慈雲「達磨図自贊・不識」
紙本墨画 132.3×54.5 cm

大阪市立近代美術館蔵

達磨（5～6世紀？）はインドから中国に渡り、嵩山の少林寺で9年間坐禅したという。これは「面壁達磨」図である。

「梁の武帝、達磨大師に問う、如何なるか是れ聖諦第一義。磨云う、廓然無聖。帝曰く、朕に対する者は誰ぞ。磨云う、不識。帝、契わづ。達磨、遂に江を渡りて魏に至る」（『碧巖録』第1則）

慈雲

（1718～1805）真言宗の僧。近世の「四大書僧」のひとり。大阪市北区の生まれ。号は葛城山人など。

13歳で出家、その後、宗派を問わず学び修行した。雲伝神道の開祖。梵学を研究し『梵学津梁』約1000巻などを著した。

加賀千代尼・蓮月尼・貞心尼は、江戸後期の三大女流歌人、といわれる。

加賀千代尼（元禄16年・1703～安永4年・1775）俳人 石川県白山市生まれ。千代・千代女とも呼ばれる。千代は父から名づけられた俳号。号は草風 法名は素園 本名は「はつ」 表具師六兵衛と母つるの長

女として生まれた。12歳のとき家を出て、あちこちで下女として働いたらしい。その後、俳人・岸弥左衛門の弟子となる。北越地方では俳諧が大流行していた。千代女は16歳で地方の女流俳人として名を成し、17歳頃には各務支考にみとめられ、全国に知られるようになつた。16歳頃結婚し、子も産んだが、1年余りで夫が病没し、子も亡くなり、実家に帰つた、という説と、不嫁説がある。その後、父母や兄に不幸がつづき、表具師のあとを継いだという。52歳で家業を養子に譲り尼になる。1700余の句を残し、長い病のあと逝去した。

1764年、既白編『千代尼句集』を上梓した。その後『松の声』を上梓。千代は美女であったという。



千代尼「落鮎自画贊」紙本水墨 57.2×27.0 cm 個人蔵

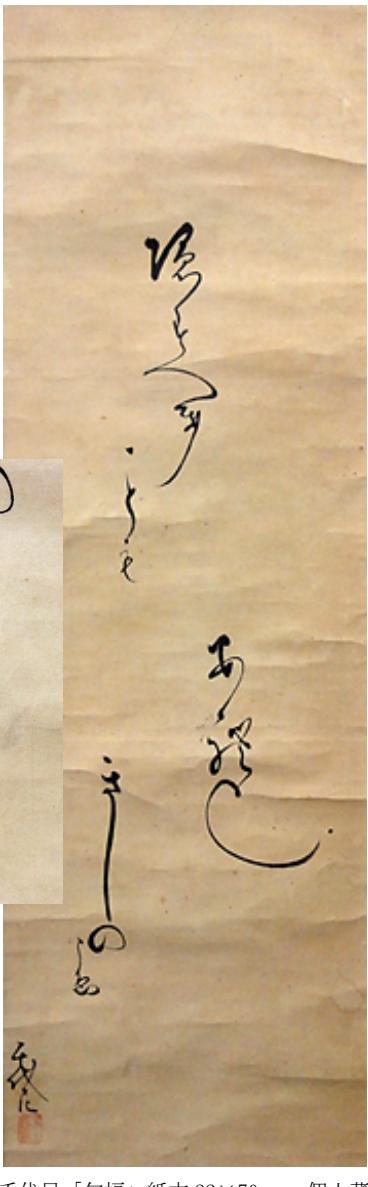


落鮎や日に日に水のおそろしき 千代尼

句は30歳前後の作だが、書画は50歳代と思われる。

「朝顔やつるべ取られてもらい水」が有名。

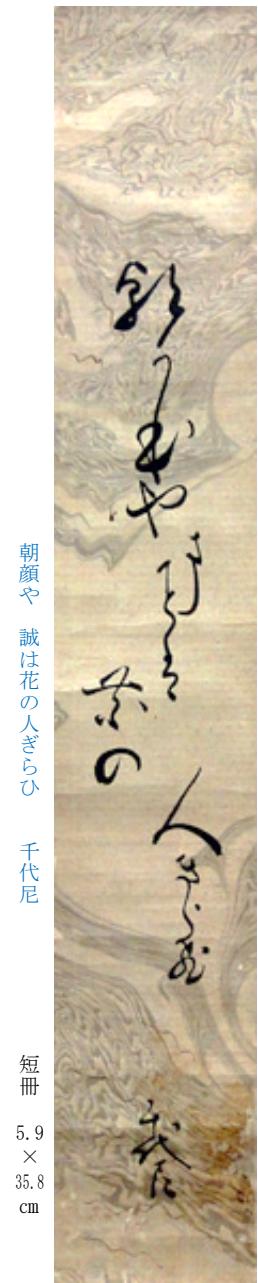
辞世の句は「月も見て我はこの世をかしく哉」



部分拡大

千代尼「句幅」紙本 22×70 cm 個人蔵

隠すべき事もあれなり雉子の声



朝顔や 誠は花の人ざらひ 千代尼

短冊
5.9
×
35.8
cm

大田垣蓮月・寛政3年（1791）～明治8年（1875）尼僧・歌人・陶芸家・書家。

京都河原町三本木の生まれ。絶世の美人だったといわれている。

実父は伊賀上野の城代家老藤堂良聖。

実母は不明。（遊女？）

生後10日で知恩院の寺侍

大田垣光古の養女となり、

誠と名付けられた。生母は誠を出産後、

丹波亀山藩（今の亀岡）の藩士の妻となつたという。

大田垣光古には5人の実子がいたが若くしてすべて亡くなつた。

で、1804年、光古は城崎から養子を迎える名を望古とさせた。

誠は7歳頃から16歳頃まで丹波亀山城に女中奉公に出された。（生母の紹介か？）

そこで薙刀・柔術などの武芸や和歌などを学んだ。この間に養母亡くなる。

奉公を終えた誠は文化4年（1807）頃、望古と結婚、一男二女が生まれたが、三人とも夭折、甥の斎治は誠の次男かもしれない。文化12年（1815）放蕩無賴な夫は離縁され、その後すぐ亡くなり、誠は24歳で寡婦となつた。大田垣家の新たな養子となつた古肥と、文政2年（1819）再婚（28歳頃）。

一男一女が生まれたが、夫は文政6年（1823）病没。蓮月は32歳。息子も夭折？

夫の死の前日、養父光古と共に剃髪し出家、誠は蓮月、光古は西心と号し、

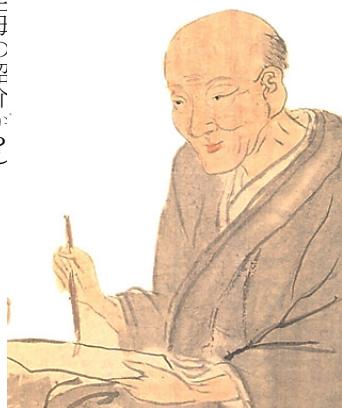
養父と娘と3人で知恩院真葛庵に住む。2年後に6歳で娘が亡くなり、

その7年後に養父西心逝去（1832年・蓮月41歳）。蓮月は、なくなく知恩院を去り、

岡崎村に移つた。この頃の岡崎村は多くの文人が住む煎茶のメッカとなつていた。



知恩院内の真葛庵



「蓮月尼画像」部分 富岡鉄斎画 神光院蔵
明治30年、鉄斎62歳の作。蓮月尼没後20年
以上たってから描かれたもの。63.5×33.2 cm



栗田神社参道の碑

常ならぬ世はうきものとみつぐりの 独りのこりのものとこそおもへ

（蓮月）

かきくらしふるはなみだか無人を おくりし山の五月雨のころ

（蓮月）

たらちねのおやのこひしきあまりには 墓に音をのみなきくらしつつ

（蓮月）

岡崎村には6年ほどいたようである。蓮月は住居を転々とした。（「屋越し蓮月」と呼ばれた）年に13回も越した年もあるという。そのころ生計をたてるために焼き物をはじめた。

当時煎茶道が流行していて、蓮月の焼き物は煎茶道のための器であった。

栗田神社近くの栗田焼の窯元や五条坂で焼いてもらつていてらしい。

蓮月の焼き物は、後に「蓮月焼」と呼ばれ、有名になる。

手すさびのはかなき物をもちいでて うるまの市に立つぞわびしき

（蓮月）

蓮月は、聖護院村の富岡家の隣に引越してきた。京大病院構内から蓮月焼の遺物が発見されている。

嘉永3年（1850）頃、蓮月は鉄斎に会う。蓮月59歳、鉄斎（本名は富岡鉄輔）14歳頃である。

鉄斎は父の命により、蓮月宅に同居する。

鉄斎は侍童として暮らし、蓮月に孫のように可愛がられ、
学問や芸術の修業に励んだ。

蓮月は鉄斎の人間的な成長に大きな影響を与えたといふ。

嘉永4年（1851）東山七条の大仏方広寺に寄寓。

安政3年（1856）春、鉄斎の父の仲介で北白川の心性寺に寄寓（65歳）。

鉄斎は蓮月と寝食を共にし、岡崎土を寺まで運んだり、

作品を窯元に運ぶなど、製陶を手伝つた。



京大病院構内で発掘された蓮月焼

文久2年（1862）、安政の大獄の難を避け、長崎に遊学していた鉄斎が帰京して、聖護院村の蓮月の旧居に私塾を開いた。蓮月は心性寺へ移る。

文久3年（1863）西賀茂に移住。（72歳頃）

鉄斎はこの頃から生活費を稼ぐために絵を描きはじめている。（26歳頃）

慶応2年（1866）春、75歳の時、西賀茂村の神光院の茶所に鉄斎と伴に引越した。ここが蓮月の終の住処となつた。蓮月尼は世を避けて焼き物に没頭した。

明けたてば墳もてすさび暮れゆけば 仏をろがみ思ふ事なし

（蓮月）

蓮月が60歳を越してから、「蓮月焼」や短冊が京名物のひとつとして有名になつた。この頃は「蓮月焼」は京みやげの最上のものとして注文がひつきりなしで、お金が入るばかりになつたといふ。

お金持ちになつた蓮月尼は、布施行を亡くなるまで続けた。

布施行は、石田梅岩の石門心学の伝統らしい。

この伝統は蓮月から鉄斎へと引き継がれていく。

嘉永3年（1850）の畿内の飢饉のとき30両を奉行所に喜捨した。

文久2年（1862）独力で資金を出して丸太町橋を架けた。

慶応2年（1866）頃の飢饉では粥施行所にお金を喜捨した。

それ以外にも、様々な古着を買い込んで困窮している人々にたびたび配つたといふ。

慶応4年・明治元年（1868）正月、鳥羽伏見の戦で幕府敗北。明治政府樹立。

『蓮月・式部二女和歌集』刊。（77歳）

慶応4年、戊辰戦争（1868～1869）が起ころる。

うつ人もうたる人も心せよ 同じ御國の御民ならずや

（蓮月）

あだみかた勝つも負くるも哀なり 同じ御國の人と思へば

（蓮月）

明治3年（1870）近藤芳樹編の蓮月歌集『海人の刈藻』刊。（79歳）

明治8年（1875）10月末、腸チフスに罹り、12月10日、入寂。

入寂の何年も前、蓮月尼は死出の旅支度をしていた。

白木綿の一反風呂敷に、月と蓮を鉄斎に描かせて、

遺体を包む布を準備し、そこに、次の辞世を書き添えた。

棺桶内の経帷子にも、次の辞世を書いた。

ちりばかりこころにかかる雲もなし けふをかぎりの夕暮れの空

（蓮月）

入寂の二ヶ月あまり前ころから尼僧寂黙が看病した。蓮月尼は寂黙尼に、

「無用の者が消えてゆくのに多用の人を煩わすにはおよばない、

知らせるのは鉄斎だけにしてほしい」と頼んでいたといふ。

しかし、別れを悲しむ西賀茂村の村民総出で弔つたとのこと。

神光院の西にある西方寺の近くの小谷墓地の桜の大樹の根方に、

鉄斎の筆で大田垣蓮月墓と刻された小さな墓がある。

小谷墓地は当時は共同墓地であった。

蓮月尼の人柄にピッタリの素朴で清楚な自然石（鞍馬石）の墓石である。

山里は松の声のみきこなれて 風ふかぬ日は淋しかりけり

（蓮月）



小谷墓地にある蓮月尼墓



桜の大樹の根方にある墓



茶所の左奥の蓮月尼碑
これも鉄斎の字



神光院内にある茶所（蓮月庵）



神光院本堂前にある歌碑
宿かさぬ人のつらさを情づきよ
おぼる月夜の花の
したふし下臥



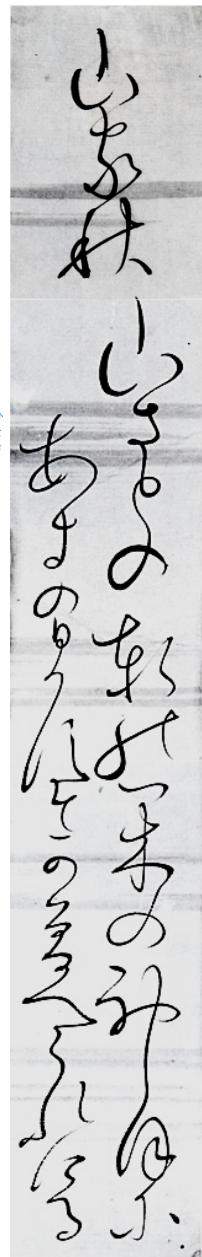
神光院（北区西賀茂）真言宗の寺

蓮月尼の書

蓮月は女中時代に、当時主流であった御家流の習字手本で、御家流をしつかり身につけたようである。40歳前後まで、御家流の字を書いていた。その後、陶芸をはじめ、その陶芸が蓮月の書を変えてゆく。

徳田光圓氏の論考を参考に少し見てみたいと思う。それによると、蓮月の書は三つの時期に大別できるという。一、短冊の裏に署名があるもの。（最初期のもの）二、短冊の表に署名をはじめた時期のもの。

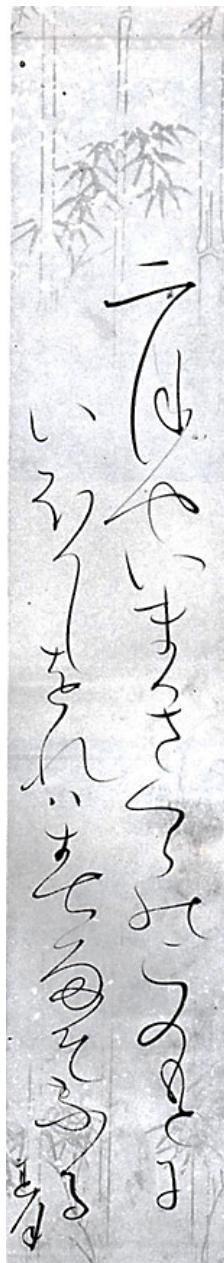
三、作品に署名と年齢を記入した時代のもの。



山家秋

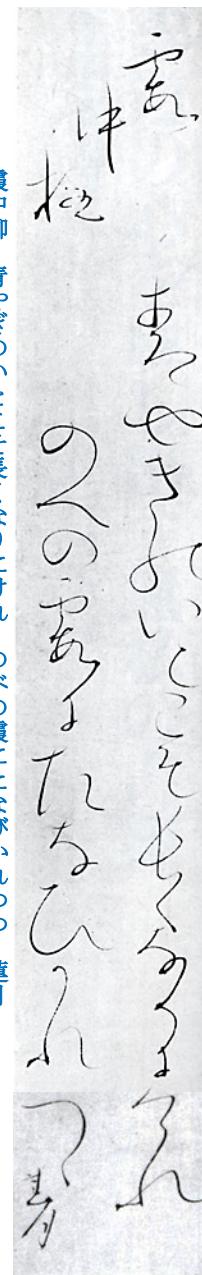
山ざとの軒の一木の初しほに あきの日かずぞかぞへられるける

これは最初期の短冊（40歳頃）。書風は御家流の垂流。署名は短冊の裏面にある。御家流の特徴は、線が鈍い。線に細太の変化が大きい。文字の大小の変化も多い。連綿線が多い。全体構成が騒々しく、すつきりしない、懷が狭く字の中の余白が細切れ、線質は軽く、筆先が浮いている、など。日暮れて道遠し、である。



一月や いまかさくらの このもとに いほりしをれば春雨ぞふる 蓮月

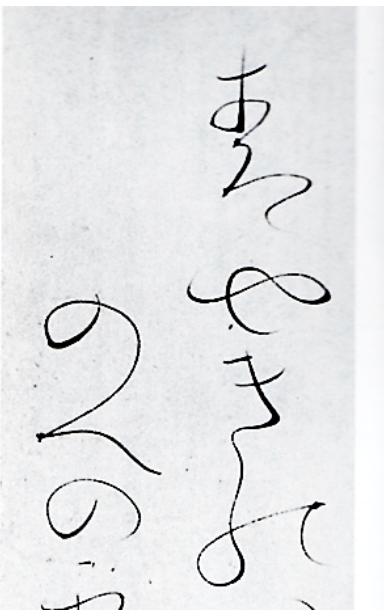
右の短冊は50歳中頃のもので、陶芸をはじめて10年が過ぎ、陶芸で生活できるようになつてきた頃の作。陶刻書の影響からか、連綿が少なくなり、線の太さに極端な変化がなくなり、一字の懷が広くなり、御家流とは少しづがつてきている。しかし、まだまだである。書に開眼するまでに、あと10年はかかる。途遠し！



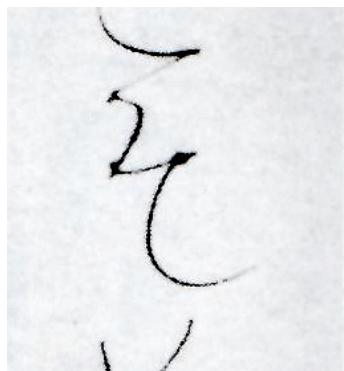
霞中柳 青やぎのいとこそ長くなりにけれ のべの霞にたなびかれつゝ 蓮月

右の短冊は70歳代中頃のもの。蓮月流が完成。40歳頃から30年以上を経てやつとである。

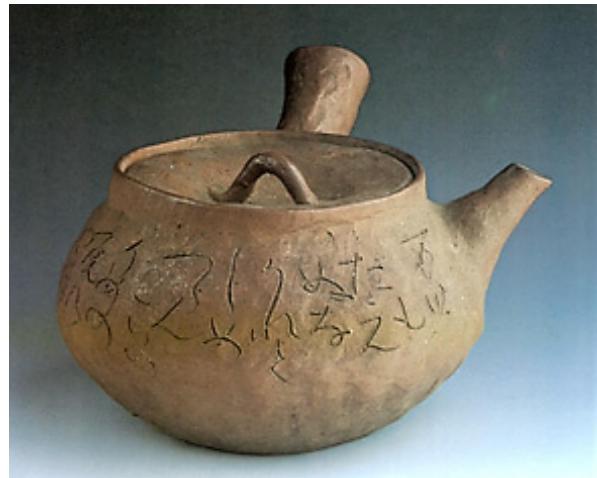
連綿がほとんどない。字形が扁平になり、収筆が水平にはじき出されている。面相筆特有の転折と強い突き返し。澄んだ淀みない線質。柳葉筆から面相筆にかわり、歯切れの良い線になり、筆峰が線の中を通り出すようになる。



部分拡大 収筆が水平方向へ払われている。陶器に和歌を刻すことによって生まれた横長の字形（瓜形字形）の誕生。



部分拡大 面相筆特有の転折とリズミカルな強い突き。



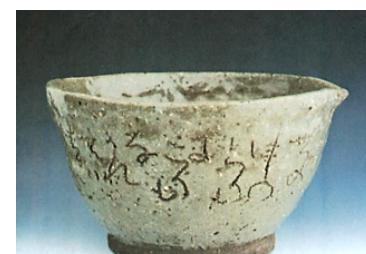
蓮月作「急須」
まんせい た しめ
万世も堪えぬながれと湿つらん
その亀の尾の山の下水



蓮月作「徳利」83歳 6.6×11.8 cm
うかれ来て花の露にねむるなり
こはたが夢のこてふなるらん



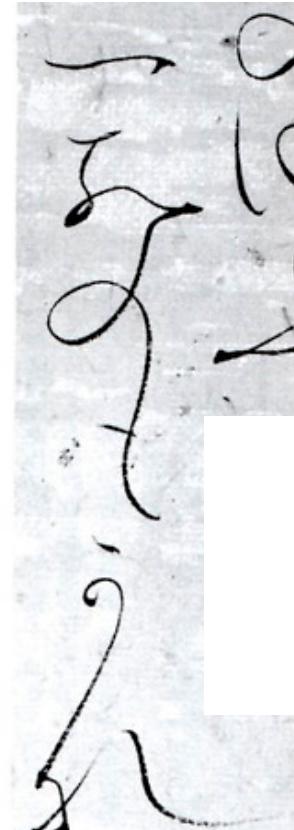
蓮月作「茶碗」75歳頃作
口径 12×高さ 6.3 cm
ゆくすえ
世のちりをよそにはらひて行末
ちよ まつかいぜ
の 千代をしめたるやどの松風



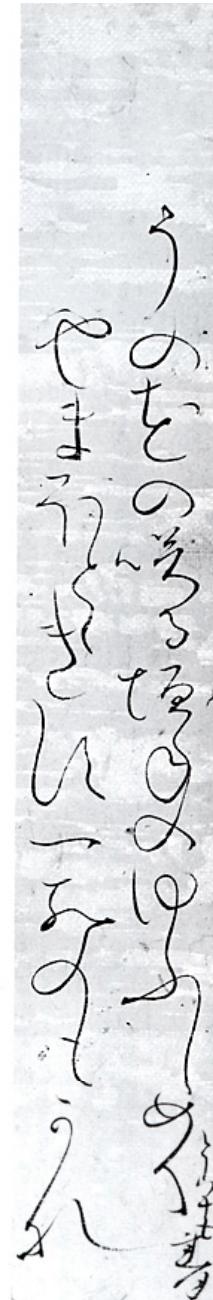
蓮月「菓子鉢」81歳 口径 20×高さ 11.2 cm
世の中のちりもにごりもながれては
清きにかへるかもの川波

蓮月焼

自詠の和歌を釘彫りで刻した陶器。
在世当時から模造品が多い。蓮月は、
役にたつて喜んでいたという。

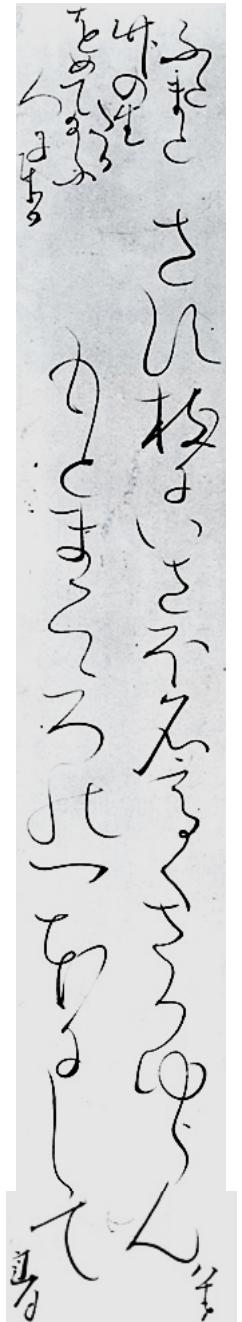


蓮月尼は、75歳頃から死の時まで
の10年ほど、神光院茶所に閑居し、俗客を避け、孤独と静寂のなかで歌や焼物作りに打ち込んだ。この間につくられた、歌と書と焼物が一
体となった創造物は、蓮月尼が理想とした夢の形である。



うの花の咲ける垣ねのゆゑにめり やまほどときす一声もかな とし八十七蓮月

これは83歳の作。蓮月尼は、ぞーと求め続けていた世界と、ついに出会ったのだろう。心と筆が一体となつた書は、蓮月尼がそこにいるかのようである。良寛と近い境地に到つたのではないだろうか。



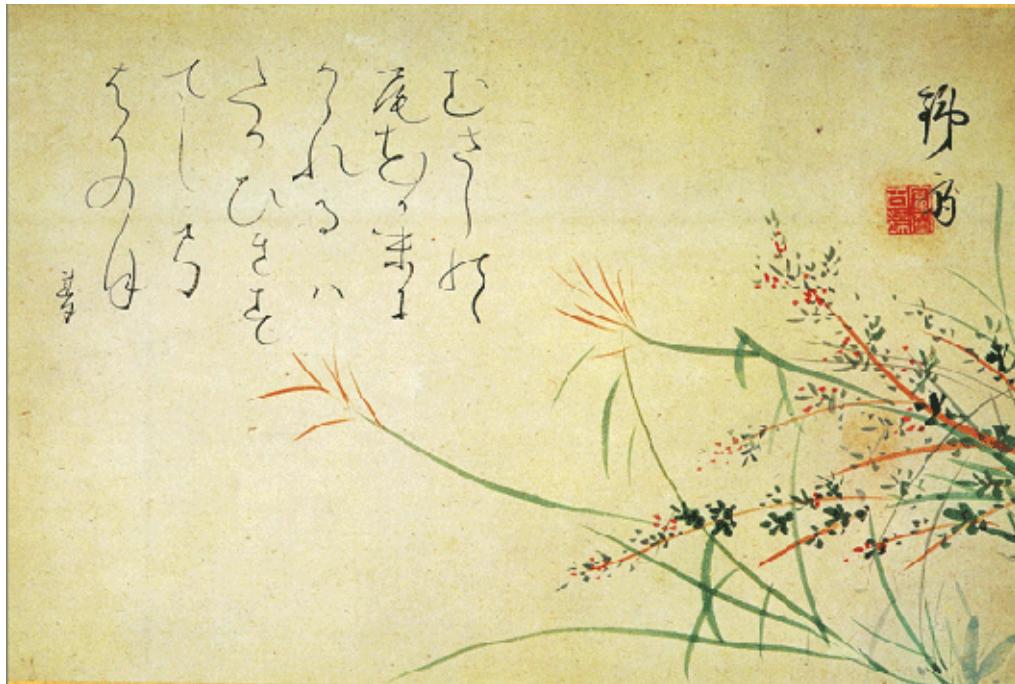
ふたまた竹の生たるをめでとふ人に奉る

さす枝にいさほ名高くさかゆらん もとまごいろの一本にして 八十才 蓮月

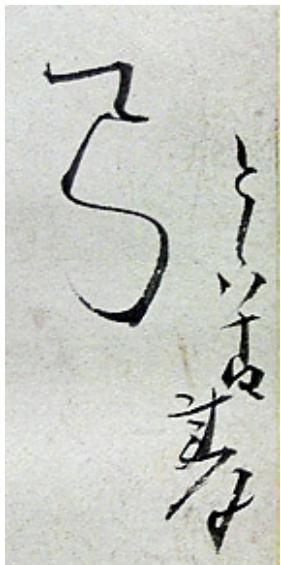
右は80歳の作。満では78歳か。作品が多い77歳から79歳の頃は、最も円熟した時期だったと思われる。

紙面から筆が舞上がり、宙を舞つて無限の時間と邂逅し、生き生きとした力強い線になつて紙に刻される。

筆の上下動の見事さ。この頃から曲線的な字形に直線の縦線が書かれはじめている、という。



蓮月贊「秋草図画贊」75歳頃 33×49 cm 鉄斎画 鉄斎美術館蔵
武藏野の尾花が末にかかるるは たがひきすてし弓はりの月 蓮月



とし八十四蓮月

有名になつてゐた蓮月は、無名で売れない画家
鉄斎のために和歌の贊を入れ、絵が売れるよう
助けた。蓮月は、鉄斎のために和歌を書いた懐紙
などを何枚も与えたという。鉄斎が絵を先に描
き、後で蓮月が贊を入れたこともあつただろう。
鉄斎の父の富岡維叙と蓮月は友人で、蓮月尼の
一人住まいを心配して鉄斎を蓮月のもとに住み
こませたらしい。

富岡家は代々、石門心学を家学としてきた家柄
であった。石田梅岩を開祖とする石門心学は江戸
時代後期に大流行した町人のための生活哲学で
ある。「正直・僕約・勤勉」の三徳を重んじ、「本
心の学」を唱えた。本心とは自然のこと。

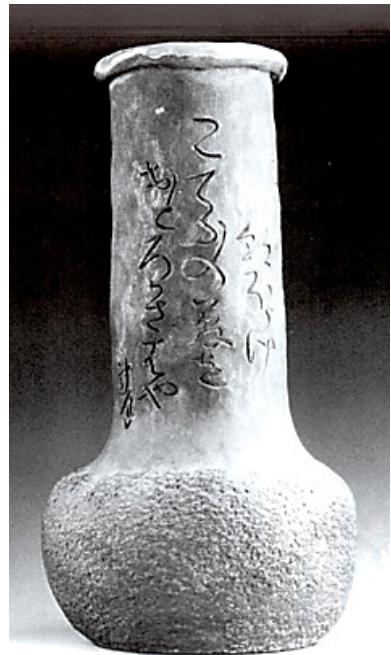
蓮月は、栗田の老女から陶器づくりをすすめられ、偶然、作陶をはじめたという。

江戸時代の文人趣味の流行にともない、文人や上流階級に煎茶が流行し、蓮月焼は多くの人びとから歓迎された。

当時、京焼は伝統的な栗田焼と五条坂の清水焼とに分かれていた。職人たちから素人芸と思われていた蓮月焼は、信楽式の紐作りで、自詠の和歌を釘彫りしたことで、この京焼の世界に新風を吹き込んだといわれている。



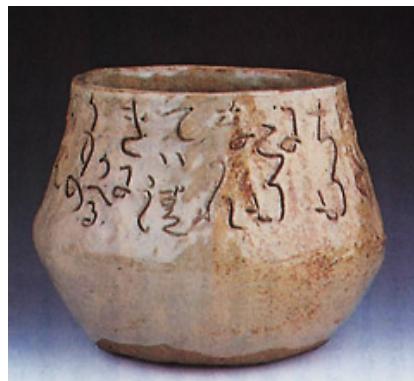
右の花生の部分



蓮月作「和歌彫小皿」85歳 各径 10 cm

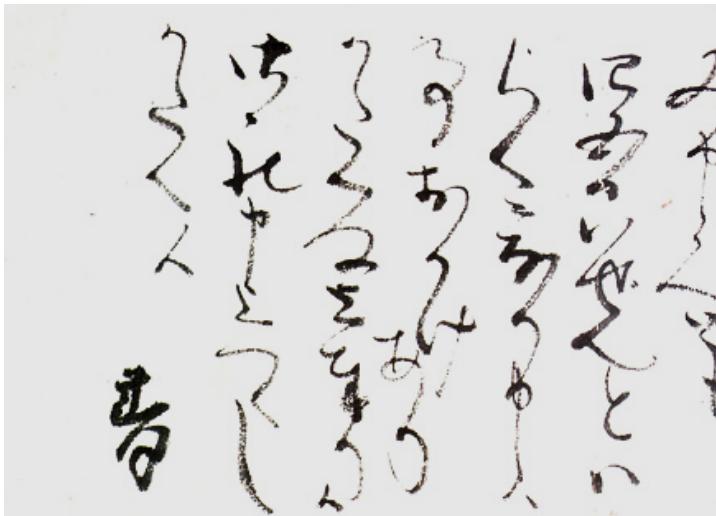
上段右より

鶯のみやこにいでん中やどに かさばやとおもふ梅咲にけり
うかれきて花の露にねむるなり こはたがいめのこてふなるらん
わがやどの垣ねばかりに有明の 月とみるまで咲るうの花
ゆく末のさちとよはひをふた葉にて ちとせをまつやひさしかるらん
このきみはめでたきふしをかさねつつ 末のよ長きためしなりけり



蓮月「水指」79歳 高さ 13.2×胴径 13 cm

世の中のちりもにごりもながれては
清きにかへるかもの川波



蓮月筆「神光院宛絶筆書簡」85歳 16.4×58.7cm 部分

「あ申候へとも
四五日いぜんとハ
らくになり申候
事おかげあり
かたく存上奉り候
御札申上つくし
かたく候 蓮月」

死の3日前に病床から神光院の智満和上に宛て書かれた手紙。

蓮月のため断食祈祷をつづけた和上へ感謝の気持ちを述べたもの。

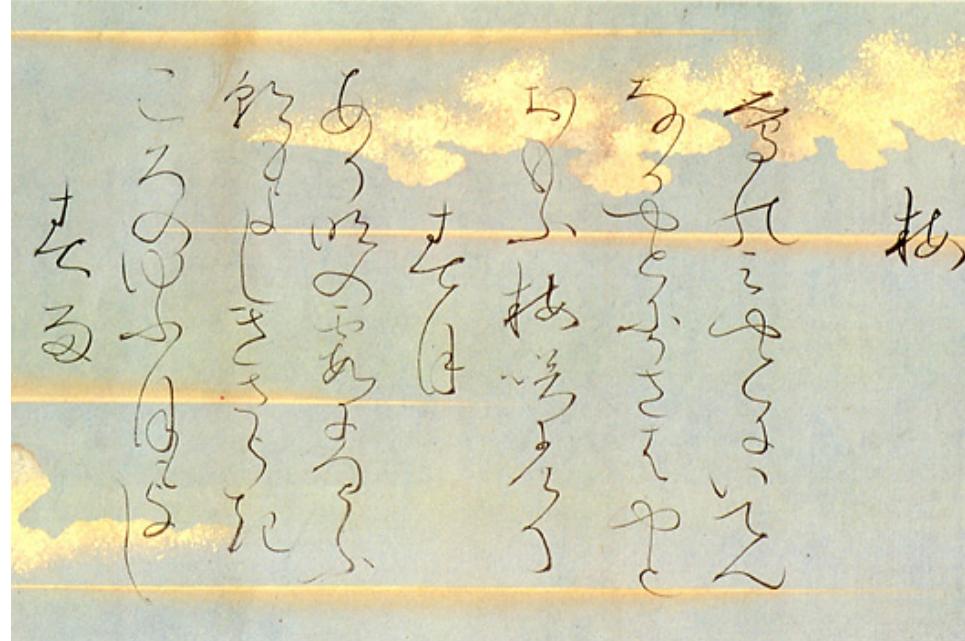
生き生きとした力漲る線である。

死の直前とは思えないと、蓮月は和歌を書くことを選んだ。

和歌と煎茶道と陶芸と石門心学が融合することによって生まれた蓮月の書。

蓮月尼は何を希求していたのであろうか。生活のために始めた陶芸を通して、希求する理想の世界を形にするための果てしない修業や稽古が、蓮月という珍しい人間を作り上げる手段となり、ついに、自分が希求する世界を創造することが出来た稀な芸術家の一人が蓮月尼だったのではないだろうか。

まさに、芸術は人なり、である。



蓮月作「和歌卷子」19.8×374cm 卷頭部分 81歳 青色料紙に36首が書かれている。神光院藏

「和歌卷子」は、神光院の智満和上に贈ったもの。

詞書のあとに一首を3

行に書いている。

書風は完成された蓮月流書風は完成された蓮月流

感情を平易な語で、感じたまま、ありのままにうたう

歌のこと。

1861年秋、橘曙覧が

息子の今滋と共に蓮月を訪ねてきた。曙覧は万葉調の

生活歌を詠んだ孤高清貧の

歌人である。

越路より四方に照らしし

玉手匣 あけみのうしの亡

きぞ悲しき（蓮月）

これは、曙覧の死をしつ

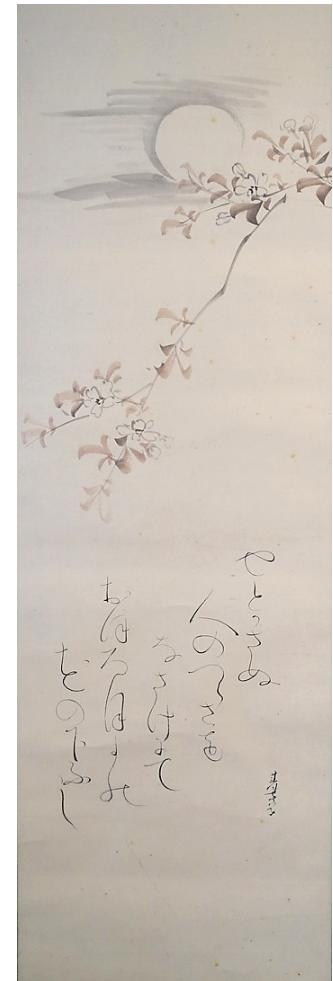
た蓮月が詠んだ悼歌。

蓮月の現存歌は約900

首。四季や日常生活が、書

風と同様、優美に繊細に女

性らしく表現されている。



蓮月作「桜と月自画贊」
宿かさぬ人のつらさを
情にておぼろ月夜の花
の下臥
蓮月七十八才

書道もろもろ塾(2014, 12, 21)

貞心尼

(1798・寛政10～1872年・明治5) 曹洞宗の尼僧 良寛の弟子 歌人

俗名は、奥村ます 法名は孝室貞心比丘尼、孝室貞心尼。新潟県長岡市の長岡藩士奥村五兵衛の次女。

2歳のとき母を亡くし、繼母に厳しく育てられた（いじめられた）という。

文学、学問好きの美少女だったらしい。内職をして家計を助け、余ったお金で筆や紙を買って学問に励んだといふ。貞心尼は並外れた美人であった。孤独な境遇に育ち、感受性豊かで、夢みがちな才女であつたらしい。

筆跡は、伸び伸びとし、豪放で男性的、率直で積極的な人柄であつたかと想われる。相馬御風は次のように書いている。「貞心尼は字も能く書き、歌も能く詠み、文章も能く書いた・・・かなり勝気な性質の女であつたろう」とも窺われる。（相馬御風『貞心と千代と蓮月』より春秋社 1930年）しかし、本当のところは分からぬ。

文化11年（1814）16歳で漢方医の関長温と結婚したが、性格が合わなかつたのか、夫の放蕩のせいか、文政3年（1820）22歳頃離婚。柏崎郊外の新出の山に庵を結んでいた眠龍、心龍の二人の尼僧を訪ねて出家した。並外れた美貌の貞心尼は土地の人びとの噂の種となり、「姉さ庵主」と仇名されるようになつたらしい。

文政9年（1826）3月、28歳、長岡・福島村の閻魔堂に移る。良寛の噂を聞き、弟子になるため、4月初め頃、島崎の木村家を訪問。しかし、良寛は他所に仮住まいしており会えなかつた。夏にも再度訪ねて行つたようだが、まだ良寛は帰つてきておらず、貞心尼は手作りの手まりに手紙を添えて置いて帰つた。たぶん、この年か、

文政10年（1827）の秋、ふたりは初対面したと想われる（良寛69歳、貞心尼28歳の年である）

弟子になつた貞心尼は、あこがれの良寛に逢つたために、福島村から、難所といわれる塩入峠を越えて、島崎まで4年ほど通うことになる。村人たちは、二人の仲を噂し心配したが、二人は一向に意に介する風ではなかつたという。貞心尼は文学少女時代からあこがれていた西行や芭蕉のような人（良寛）に逢えたのである。良寛への彼女の愛が眞実であることは、良寛の死後の彼女の行動をみれば明らかである。

天保2年（1831）1月6日、良寛遷化（73歳）。貞心尼33歳。

天保5年（1834）貞心尼は良寛の肖像画を松原雪堂に頼み、贊を書いた。

贊は「うきぐものすがたはこゝにとどむれど心はもとの空にすむらん」

天保6年（1835）5月1日、『蓮の露』完成する。37歳。

『蓮の露』は、貞心尼が良寛の思い出を残すために、良寛の略伝や良寛の和歌や二人の贈答歌などを収めて冊子にして、良寛の死後40年以上にわたり、机身はなさず持ち運び、秘蔵しつづけたものである。すべて貞心尼の自筆で、書風は、良寛に習つたであろう『秋萩帖』風である。字というものは、尊敬する人に似るものである。

『蓮の露』



『蓮の露』表紙

和紙を袋とじにした冊子本。表紙と裏表紙と、100頁からなる。縦24cm、横16.5cm。柏崎市立図書館蔵。

構成は、序文と本文からなる。序文は1頁から7頁まで、良寛の略伝とこの冊子編纂の動機などを記述。

本文は9頁から83頁まで。良寛の歌151首、俳句1首、良寛作の俳句8首、良寛と貞心合作の短歌1首など。

良寛と貞心尼唱和の歌、不求庵のこと、山田静里翁のこと、良寛禪師戒語、「蓮の露」の命名のことなど、本文の最後に良寛の亡くなつた日が記されている。他人によつて編纂された最初の良寛歌集である。

良寛禪師と聞えしは出雲崎なる。（十八才）

橘氏の太郎のぬしにておはしけるがはたち
あまりふたつといふとしにかしらおろし

『蓮の露』序文冒頭部分

あとは人 先は仏にまかせおく
おのが心のうちは極楽

七十五 貞心

御かへし 師

身を捨てて世を救う人も座すものを草の庵に暇求むとは

久方の月の光の清ければ照らしぬきけり 唐も大和も昔も今も

嘘も誠も

おまかせゆきけり
おまかせゆきけり

おまかせゆきけり
おまかせゆきけり

貞心尼「辞世の歌」

來るに似て 帰るに似たり おきつ波

立居は風の吹くにまかせて

春の初めつ方消息奉るとて

天が下に満つる玉より黄金より春の初めの君がおとづれ
手に触るものこそなけれ法の道それがさながらそれにありせば

御かへし

師

春風にみ山の雪は解けぬれど岩間によどむ谷川の水
み山べのみ雪解けなば谷川によどめる水はあらじとぞ思ふ

御かへし

師

おまかせゆきけり
おまかせゆきけり

貞心尼「辞世の歌」

久方にゆてうへよ
ゆきけりおまかせ
おまかせ

貞

いづこより春は来しそと尋ぬれど答えぬ花にうぐひすの啼く
君なくば千たび百たび数ふとも十づつ十を百と知らじを

御かへし

貞

いざさらば我もやみなむこの毬十づつを百と知りせば
靈山の釈迦のみ前に契りてしことは忘れじ世はへだつとも

御かへし

貞

あづさ弓春になりなば草の庵をとく出てきませ逢ひたきものを
いづいと待ちにし人は来たりけり今は相見て何か思はむ

師

靈山の釈迦のみ前に契りてしことは忘れじ世はへだつとも
生き死にの界離れて住む身にもさらぬ別れのあるぞ悲しき

貞



照阿画「貞心尼病中図」軸部分

159.0×40.5 cm 柏崎市立図書館蔵
照阿は 静 誉 上人のこと、貞心尼と親し
かった。英 舜ともいった。

天保12年（1841）春、43歳 正式に得度の式をおえ、釈迦堂の庵主となつた。

嘉永4年（1851）53歳、柏崎大火により釈迦堂焼失。

多くの人びとの寄進により不求庵を結んでもらい、二人の弟子と共に住んだ。ここが終生の住処となる。大火の後、その間の経緯を『焼野のひと草』として書きつづつた。

慶応元年（1864）ころから『良寛道人遺稿』出版に尽力、慶応3年（1867）に刊行された。

これがわが国で最初の良寛詩集で、唯一の木版本である。良寛の肖像は貞心尼が原画を描いたといわれる。

明治5年（1872）3月19日、貞心尼不求庵で寂滅。74歳。墓は柏崎市の洞雲寺裏山の墓地にある。自家集『もしほぐさ』を残す。